

日本・ハンガリー外交関係開設140周年
国交回復50周年記念

ハンガリーフェスティバル公演2009

ハンガリー・ソルノク市立交響楽団 日本ツアー 2009

Szolnok City Symphony Orchestra, Hungary
Japan Tour 2009

指揮

井崎 正浩

(ソルノク市音楽総監督)
Izaki Masahiro, Conductor

日本・ドナウ交流年2009



ハンガリー・ソルノク市立交響楽団 日本ツアー 2009

Szolnok City Symphony Orchestra, Hungary
Japan Tour 2009

11/21 土

ゆざ公演
16:00開演

山形県・遊佐町生涯学習センターホール

主催：ハンガリー・ソルノク市立交響楽団ゆざ公演
実行委員会、遊佐町、遊佐町教育委員会、遊
佐町国際交流推進協議会

共催：酒田フィルハーモニー管弦楽団、遊佐町国際
交流協会、遊佐町芸術文化協会、ゆざ楽友協
会、鳥海温泉遊樂里

後援：在日ハンガリー共和国大使館、ハンガリー政
府観光局、2009年ハンガリーフェスティバ
ル実行委員会、日本ハンガリー友好協会、山
形新聞・山形放送、荘内日報社、NHK山形
放送局

助成：財団法人地域創造

ブラームス
ハンガリー舞曲集より第1番、第4番、第5番、第6番

リスト
ハンガリー狂詩曲第2番

バルトーク
ルーマニア民族舞曲

休憩

コダーイ
ガラタ舞曲

エルケル
パロターシュ

J. シュトラウスII世
喜歌劇「こうもり」より「チャールダーシュ」

J. シュトラウスII世
ポルカ「ハンガリー万歳」

指揮：井崎正浩、バリ・ヨーゼフ

11/22 日

酒田公演
15:00開演

山形県・酒田市民会館 希望ホール

主催：ハンガリー・ソルノク市立交響楽団酒田公演
実行委員会

共催：酒田市教育委員会、酒田市芸術文化協会、酒
田フィルハーモニー管弦楽団

後援：在日ハンガリー共和国大使館、ハンガリー政
府観光局、2009年ハンガリーフェスティバ
ル実行委員会、日本ハンガリー友好協会、山
形新聞・山形放送、荘内日報社、NHK山形
放送局

バルトーク
組曲「ハンガリーの風景」

コダーイ
マロシュセーク舞曲

休憩

チェミツキ
アヴェ・マリア

コダーイ
ミサ・プレヴィイス

指揮：井崎正浩、バリ・ヨーゼフ
ソプラノ：ロスト・アンドレア／メゾ・ソプラノ：ボコル・ユッタ
テノール：ムック・ヨーゼフ／バス：イェクル・ラースロー
バルトーク・ペーラ室内合唱団
ソルノク・コダーイフェスティバル合唱団
ハンガリーフェスティバル合唱団Tokyo

11/23 月

山形公演
19:00開演

山形テルサ テルサホール

主催：ソルノク市立交響楽団実行委員会、山形テルサ
後援：山形県、山形テレビ2009ハンガリーフェス
ティバル実行委員会、日本ハンガリー友好協会

協賛：井崎正浩後援会
マネジメント：コンサートイマジン

バルトーク
組曲「ハンガリーの風景」

グノー
歌劇「ロメオとジュリエット」より「私は夢に生きたい」（ジュリエット）

ドヴォルジャーク
歌劇「ルサルカ」より「月に寄せる歌」（ルサルカ）

プッチーニ
歌劇「ラ・ボエーム」より「私の名はミミ」（ミミ）

シュトラウスII
喜歌劇「こうもり」より「チャールダーシュ」（ロザリンデ）

休憩

チェミツキ
アヴェ・マリア

コダーイ
ミサ・プレヴィイス

指揮：井崎正浩
ソプラノ：ロスト・アンドレア／メゾ・ソプラノ：ボコル・ユッタ
テノール：ムック・ヨーゼフ／バス：イェクル・ラースロー
バルトーク・ペーラ室内合唱団
ソルノク・コダーイフェスティバル合唱団
ハンガリーフェスティバル

ツアースケジュール / Tour Schedule

11/25 水

東京公演1
19:00開演

東京オペラシティ コンサートホール

主催：ソルノク市立交響楽団実行委員会
協賛：井崎正浩後援会
マネジメント：コンサートイマジン

グノー
歌劇「ファウスト」よりバレエ音楽 第1曲“スビア人の踊り”
歌劇「ロメオとジュリエット」より“私は夢に生きたい”（ジュリエット）

ドニゼッティ
歌劇「ドン・パスクワレ」より“騎士はあのまなざしを”（ノリーナ）

ヴェルディ
歌劇「マクベス」よりバレエ音楽 第1曲
歌劇「リゴレット」より“慕わしい人の名は”（ジルダ）
歌劇「椿姫」より第1幕への前奏曲
歌劇「椿姫」より“ああ、そはかの人か〜花から花へ”（ヴィオレッタ）

休憩

ドヴォルジャーク
チェコ組曲ニ長調、作品39（B.93）より第2曲“ポルカ”
歌劇「ルサルカ」より“月に寄せる歌”（ルサルカ）*

エルケル
歌劇「フニャディ・ラースロー」より“パロターシュ”

カールマン
喜歌劇「チャールダーシュの女王」より“シルヴィア登場の歌”（シルヴィア）

レハール
喜歌劇「メリー・ウイドウ」より“ヴィリアの歌”（ハンナ）

シュトラウスII
喜歌劇「こうもり」より“チャールダーシュ”（ロザリンデ）

指揮：井崎正浩
ソプラノ：ロスト・アンドレア

11/26 木

山梨公演
18:30開演

山梨県立県民文化ホール 大ホール

●山梨放送開局55周年記念
主催：山梨県立県民文化ホール指定管理者アドブレーション、共立、NTT-F共同事業体、山梨日日新聞社、山梨放送

バルトーク
組曲「ハンガリーの風景」

ラフマニノフ
ピアノ協奏曲第2番ハ短調

休憩

コダーイ
“孔雀は飛んだ”の主題による変奏曲

指揮：井崎正浩
ピアノ：辻井伸行

11/27 金

東京公演2
19:00開演

東京オペラシティ コンサートホール

主催：ソルノク市立交響楽団実行委員会
協賛：井崎正浩後援会
マネジメント：コンサートイマジン

バルトーク
組曲「ハンガリーの風景」

バルトーク
ピアノ協奏曲第3番*

休憩

チェミツキ
アヴェ・マリア

コダーイ
ミサ・プレヴィス

指揮：井崎正浩
ピアノ：千野宜大
ソプラノ：ロスト・アンドレア / メゾ・ソプラノ：ボコル・ユッタ
テノール：ムック・ヨーゼフ / バス：イエクル・ラースロー
バルトーク・ベアラ室内合唱団
ソルノク・コダーイフェスティバル合唱団
ハンガリーフェスティバル合唱団Tokyo

ハンガリー・ソルノク市立交響楽団

Szolnok City Symphony Orchestra, Hungary

ソルノク市立交響楽団は1965年にソルノク市の要請に応じて指揮者バリ・ヨーゼフ（姓名）によって創立され、ソルノク市と独自のオーケストラ基金によって援助される独立運営のオーケストラとして現在に至る。正団員+契約団員の計65名を基本に楽曲によって編成を拡大して活動し、創立指揮者バリ氏と現在の音楽総監督・常任指揮者 井崎正浩、レジデント・コンダクターのボイキー・ゾルターン氏によって構成され、年間17回の定期演奏会のほか毎月の特別・記念演奏会、国内各地での公演、春と秋の音楽週間での公演、スィグリゲティ劇場でのオペラ・オペレッタ公演演奏、ユースコンサート、国外での公演（特にフランス、ドイツ、ベルギー、イタリア、フィンランド、ポーランド、イスラエル）など年間150公演以上を行っている。毎年春に開かれるソルノク音楽週間のホスト・オケとして、フランス・リスト室内管弦楽団と共にこれまでにヘルムート・リリング、ニコラウス・アーノンクール、ダニエル・バレンボイムらの指揮者や、ジャン・ピエール・ランパル、モーリス・アンドレ、エマニュエル・パユらのソリストなどと共演している。また特にハンガリーのEU加盟時の2004年5月、EU政府に招かれベルギー・ブリュッセルにおける『ヨーロッパの日』コンサートで、EU国歌作曲者Didier van Damme氏作曲の“Adagio to Europe”を演奏したことから、EU諸国をはじめヨーロッパにその名を広く知られるようになった。

近年ではルーマニア・デーヴァ地区水害孤児救済のためのチャリティ公演及びルーマニア・旧ハンガリー領での演奏旅行が大きな話題になるほか、日本へはこれまで姉妹提携による民間外交使節団として山形県酒田市及び遊佐町、東京・豊島区（池袋）他で来日交流演奏を行っている。2007年にはハンガリーの経済文化に貢献した人物・団体に授けられる「プリマ賞」を受賞。今年1月からハンガリーでは唯一の独立法人化を行い、新たな芸術活動を展開する一方、ハンガリー政府及びハンガリー・オーケストラ連盟に加盟し、同時に<1st. カテゴリー>という加盟団体中最も高いランク付けの一員に加わった。ハンガリーで今もっともその動向が注目されるオーケストラである。

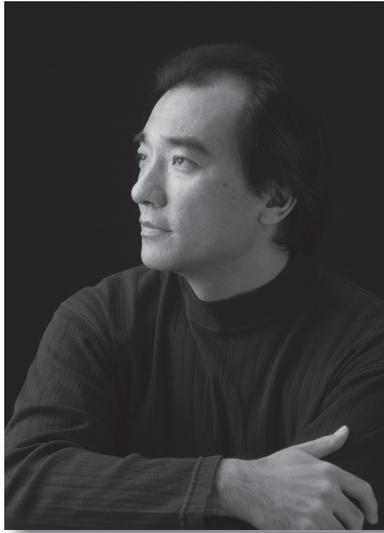
ホームページ <http://www.szolnokiszimfonikusok.hu/>

日本公演インフォメーション <http://szolnokiszimfonikusok.wou.hu/>

メンバーリスト Members List

- コンサートマスター
Szentpéteri Ildikó
- 第1ヴァイオリン
Szatmáriné Stimm Emese Ildikó
Buzás Dóra
Somos Jánosné
Abrahám Éva
Zsuková Natasa
Pátkós Balázs
Tallian András
Derecskei András
Janzsó Gergő
Pilisí Rita
Kanyurszky Péter
- 第2ヴァイオリン
Turi Éva
Heinermann György
Molnár Edit
Ócsai László
Pap Erika
Prokopiusz Andrea
Liu Song
Sinkovics Erzsébet
Szamozvanov Ivan
Szendrő Zsuzsanna
- ヴィオラ
Molnár Anikó
Bereczki Lászlóné
Gyurics György
Zbiskó Zoltán
Györke Zsuzsa
Kovács Attila
Cziglényi Gábor
Hegyaljai-Boros Zoltán
- チェロ
Sörös Éva
Balázsné Tóth Hajnalka
Nagy Imréné
Németh Kornél
Rozsos Ágnes
Nagy Anna
Nagy Ibolya
Sindel Zsuzsa
- コントラバス
Somos János
Ocskó Magdolna
Miklós Zoltán
Kőhegyi András
Piukovics Gábor
- フルート
Szalisznyó Emília
Pappné Fekete Borbála Éva
Vargáné Szűcs Györgyi
- オーボエ
Szabó Szilvia
Csiki István
Pátkós Imre
- クラリネット
Fülöp Attila
Fancsalí Lelle
- ファゴット
Benedek Sándor
Vakosné Sántha Teodóra
Rapi Péter
- ホルン
Kaczári István
Almai Tamás
Szöke Ferenc
Mészáros János
- トランペット
Farkas Róbert
Hidi János
Szabó Csaba
- トロンボーン
Kató József
Balázs Zsolt
Sára József
- チューバ
Molnár János
- ティンパニ
Tógyi Attila
- パーカッション
Holló Elemér
- ハーブ
Kocsis Andrea
- オルガン
Ócsai Szikora Ilona
- ディレクター
●●●●●
プロジェクト・マネージャ
Sipos László
- 通訳
Merényi Krisztina
田崎 克也
Nagy Tibor
- テクニシャン
Varga Lajos
- 医師
Abraham Ildiko
- 指揮
井崎正浩
Bali Jozsef





井崎正浩 (指揮)

Izaki Masahiro, Conductor

2007年4月よりソルノク市音楽総監督として活動を続ける指揮者。同市において彼のために初めて設けられたこのポストで市立交響楽団を飛躍的に音楽向上させ、試験就任後僅か3ヶ月でソルノク市長から正式任命されて以来、同オーケストラと各合唱団や舞踊団との共同事業、及び市立劇場でのコラボ・プログラミングを始めとする音楽芸術部門の総括を行っている。かつてこのようなポストには日本人はもとより他の外国人やハンガリー人自体も就いたことがない異例の抜擢でハンガリー中の大きな話題を呼ぶ中、同交響楽団2007/2008年シーズンから年間定期演奏会チケットが発売後わずか10日で毎年全て売り切れていることから、注目度の高さや今後の活躍への期待の大きさが伺えるだろう。こうした活動により“Newsweek”日本版7/8号特集「世界が尊敬する日本人～文化の壁を超え異国で輝く天才・鬼才・異才100人」の一人に選ばれる栄誉を受けている。

1995年5月、第8回ブダペスト国際指揮者コンクールで優勝。コンクール中の演奏をハンガリー国立オペレッタ劇場総裁に認められ、同年11月同劇場でレハール作曲《メリー・ウイドウ》を指揮、センセーショナルなデビューを飾る。翌年1月に同劇場初来日公演にも指揮者の一人として同行し、「音楽の友」誌コンサートベストテン'96に選ばれるなど高く評価された。その後現在までにハンガリーをはじめ、オーストリア、チェコ、スロヴァキア、スロヴェニア、ルーマニア、スイス、ドイツ、スペイン、韓国、アメリカ、オーストラリア等の国々において演奏を行っており、国際的に活躍する日本人指揮者のひとりとなっている。

特にハンガリーにおいてはこれまでにハンガリー国立響、ハンガリー国立歌劇場管弦楽団等の主要オーケストラを次々に指揮し、1998年9月からはソムバトヘイ市・サヴァリア交響楽団の芸術監督兼常任指揮者に就任し、多彩な活動を行った。また同年10月にはハンガリー国立歌劇場へデビュー（プッチーニ/歌劇「ラ・ボエーム」）を飾って大成功を収めオペラ指揮者としても地位を確立する一方、2000年1月には外国人として初めてブダペスト・ニューイヤークンサートを指揮するなど、本国ではいよいよその名声を確立しつつある。同国の“5つの堅琴国際音楽祭”委員会からは、才能と実績あるアーティストに贈られる「リラ大賞」を授与された。これまでミュゼス・ハーズ社から2枚のオペレッタCD、BBC社からサヴァリア響とのCDがそれぞれリリースされている。

また日本では1996年1月、東京シティ・フィルのニューイヤークンサートのデビューを皮切りに、読売日響、日本フィル、東京フィル、東響、九響、セントラル愛知響等の主要オーケストラに次々と連続客演して定評を得る一方で、同時にオペラやオペレッタ公演にも手腕を発揮し、これまで新国立劇場（G.プッチーニ/歌劇「トスカ」）、文化庁主催オペラガラ、国際オペラコンクールin Shizuokaでの本選指揮、日本オペレッタ協会公演（J.シュトラウス「こうもり」、レハールF.「ほほえみの国」）など活躍の場を広げ、その手腕は高く評価されている。

ホームページ <http://www.izakimasahiro.com>
<http://www.concert.co.jp/artist/izaki/profile.html>



バリ・ヨーゼフ (指揮)

Bali József, Conductor

リスト音楽院を卒業後、ただちにソルノク市立劇場で指揮者としての活動を開始し、1965年にソルノク交響楽団、1969年にはバルトーク・ベアラ室内合唱団の創立に尽力、運営に関わりソルノク市における音楽発展に大きく寄与する。後に同交響楽団が市立楽団として運営されるよう働きかけ、この楽団は彼の手塩にかけたオーケストラとして現在までに発展を続けてきた。同時にアルヴィド・ヤンソンス、イゴール・マルケヴィッチらの著名な指揮者に師事し自身の音楽性を大きく開花させ、指揮者としての活動は周辺の諸国にまで及び、オーストリア、ドイツ、フランス、スペイン、イタリア、エストニア、ルーマニア、フィンランドなどヨーロッパ各地にわたっての活動を行っており、特にベルリン交響楽団と行ったフィルハーモニーザールでのオラトリオコンサートは高い評価を得た。

レパーリーはバロックから20世紀まで幅広く、さらに現代ハンガリー人作曲家（コチャール・マイクロシュ、シュガール・アンドラーシュ、ペトロヴィッチ・エミール、ファルカシュ・フェレンツら）の作品を数多く初演してきたことは特筆されるべきであり、ハンガリーを代表する指揮者としてその名を広くとどめている。



ロスト・アンドレア (ソプラノ)

Rost Andrea, Soprano

ブダペストに生まれ、フランツ・リスト音楽院を卒業。1989年、ブダペスト国立歌劇場にグノーの「ロミオとジュリエット」のジュリエットでデビュー。1991年、ウィーン国立歌劇場のソリストとなり、ツェルリーナ、アディーナ、スザンナ、ルチア、ヴィオレッタなど、数多くの役を歌った。

1994年、リッカルド・ムーティに招かれて歌ったスカラ座のリゴレットのプレミエで国際的な大成功を収める。その後、パリ・バステューユ・オペラにスザンナで、コヴェント・ガーデンに同じくスザンナ、マドリッド・レアル劇場に「カルメル会修道女の対話」のブランシュでデビュー。メトロポリタン・オペラには1996年、「愛の妙薬」のアディーナでデビューした。

東京の新国立劇場にも頻繁に招かれている他、古巣のブダペスト国立歌劇場にも定期的に登場しジルダ、ルチア、ヴィオレッタなどを歌っている。

ハンガリーの国家芸術家の称号を持ち、1997年にリスト賞を、2004年にコシュート賞を受賞している。ソルノク市名誉市民。



ボコル・ユッタ (メゾ・ソプラノ)

Bokor Jutta, Mezzo Soprano

フランツ・リスト音楽院を卒業後、直ちにハンガリー国立歌劇場のメンバーとなり、カルメン、ケルビーノ、アムネリス、スズキなどを歌う。1985年BBC主催のカーディフ国際音楽コンクールで2位を獲得。1985年から1990年まで、ウィーン・フォルクスオーパーのメンバーを務めた。オラトリオ歌手としても、ベルリン、ブリュッセル、ウィーンなどで歌っている。2006年、バルトク記念館音楽ホール of ディレクター兼キュレーターに就任した。



ムック・ヨーゼフ (テノール)

Mukk Jozsef, Tenor

1962年ハンガリーのグドゥルー生まれ。1989年フランツ・リスト音楽院の音楽オラトリオ科を卒業。1991年オペラ科のディプロマを取得すると同時にハンガリー国立歌劇場のソリストとなり、これまでにイドメネオ、タミーノ（「魔笛」）、アルマヴィーヴァ伯爵（「セヴィリアの理髪師」）、ネモリーノ（「愛の妙薬」）、アルフレート（「こうもり」）などを演じている。バッハ、ヘンデル、モーツァルトをはじめとする数多くの宗教音楽、ベートーヴェンの「第九」などでも頻繁にソリストを務めている。



イエクル・ラーズロー (バス)

Jekl László, Bass

フランツ・リスト音楽院を1979年に卒業。1980年から2001年までハンガリー放送合唱団のメンバーを務める傍ら、レッチョ・エミリア、ペーザロ、スカラ座などでソロ歌手としても出演。2001年1月、ハンガリー国立歌劇場に、「ラインの黄金」のドンナーでデビュー。ザグレブの国立劇場ではエトヴェシュ・ペーテルのオペラ「三人姉妹」のソリョーヌイを歌っている。2000年10月に、ゾルターン・ヴァーシャルヘイ賞を受賞してその名を一躍高めた。



安部克彦 (合唱指導)

Abe Katuhiko

東京音楽大学指揮科卒業。同大学研究科修了。これまでに、藤原歌劇団、二期会、新国立劇場他で、音楽スタッフとして数多くの公演を支えてきた。またBUNKAMURA「トゥーランドット」エディンバラ公演、藤原歌劇団「椿姫」韓国公演に副指揮者として同行している。最近は特にイタリアオペラの公演に多く関わり、アルベルト・ゼツダ、チョン・ミョンフンの各氏をはじめ著名な指揮者のアシスタントを務めた。オーケストラ・合唱団の指揮・指導にも力を注ぎ、数多く指揮台に立っている。東京音楽大学大学院、昭和音楽大学、日本オペラ振興会歌手育成部他で指導にあたっている。



モルナル・エーヴァ (バルトーク室内合唱団)

Molnár Éva

ハンガリー・メゾエートゥルに生れ、後にソルノク及びニレジハーザで数学と合唱指揮を学ぶ。1989年にブダペスト文化研究所にてパルカイ・イシュトヴァーン指導の下に合唱指揮者“A”ランクライセンスを取得した後、2002年にはブダペスト・ビジネス・スクールで財務と会計学も修める。2006年にはベーチ音楽芸術大学で演奏学位を取得している。1989年から常任指揮者としてバルトーク室内合唱団との活動の他、同ソルノク市のコダーイ合唱団(混声)をはじめとする合唱団の指導、またハンガリー国内における合唱講習やマスターコースでその手腕を奮い、ハンガリー国外からも高い評価を受けている。



バルトーク・ベーラ室内合唱団 (女声合唱)



バルトーク・ベーラ室内合唱団は、ソルノク地方行政政府によって1969年に創立された12名のメンバーからなるハンガリーでは唯一のプロフェッショナルの女声合唱団であり、1989年以來モルナル・エーヴァが芸術監督兼指揮者を務めている。レパートリーはバロック・ルネッサンスから現代音楽まで幅広く、特に現代ハンガリーを代表するコチャール、オルバーン、カライ、ジョンジョシらの作品の演奏に他の追従を許さない高い完成度で作曲家からの信頼も厚い。今回が初来日。



ソルノク・コダーイフェスティバル合唱団 (男声合唱)

Szolnoki Kodály Ünnepikórus

バルトーク室内合唱団が混声合唱団として活動する際のパートナー合唱団。元々デブレツェン・コダーイ合唱団やハンガリー国立合唱団などのプロ合唱団に所属するメンバーで構成され、ほぼ固定した顔ぶれによるパートナー合唱団として、これまでソルノク市立交響楽団とは定期演奏会や特別演奏会などで「第九」、「戴冠ミサ曲」(モーツァルト)、オペラ合唱曲(ヴェルディ)、「スターバト・マーテル」(ドヴォルジャーク)、「ミサ曲」(ドブログス)などの作品で共演をしている。今回が初来日となる。



ハンガリーフェスティバル合唱団 Tokyo (混声合唱)

Hungary Festival Chorus Tokyo

今回のハンガリーからの合唱団と共演する日本側合唱団として特別に編成された合唱団。メンバーはもともと様々な団体の合唱団員として数多くのステージを経験しており、指揮者・井崎正浩とも共演したメンバーも多く含まれる。今回は指揮者・安部克彦による指導のもと、共演のための発声や演奏表現、音楽的解釈について特に研鑽を積んで参加し、またハンガリー合唱団との国際交流・親善にも一役買っている。

(公演協力: ジョイントコンサート国際委員会 <http://www.jointconcert.com/>)



©AFLO

辻井伸行 (ピアノ)
Tsujii Nobuyuki, Piano

1988年、東京生まれ。
1995年、全日本盲学生音楽コンクール・ピアノの部第1位受賞。
1998年、三枝成彰スペシャルコンサートで本名徹次指揮、大阪センチュリー交響楽団と共演しデビュー。
1999年、全国PTNAピアノコンペティションD級・金賞受賞。
2000年、第1回ソロ・リサイタルをサントリーホール小ホールにて開催。
以後、佐渡裕ヤングピープルズ・コンサート、東京交響楽団及び読売日本交響楽団の定期演奏会、スロヴァキア・フィルハーモニー管弦楽団、ロシア・ナショナル・フィルハーモニー交響楽団の来日公演等に出演。東京都交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団等と共演。またアメリカ（カーネギーホール・ワイルリサイタルホール）、ロシア（モスクワ音楽院大ホール）、チェコ、台湾などでも演奏。2002年にはパリで佐渡裕指揮、ラムルー管弦楽団と共演を果たす。
2005年、第15回ショパン国際ピアノ・コンクールに最年少で出場し、「批評家賞」を受賞。
2007年、エイベックス・クラシックスよりデビュー・アルバム「debut」を発売。
2008年、初の全国ツアーを開催。東京ではサントリーホール大ホールにてリサイタルを行い、大成功を収める。また同年、佐渡裕氏とともにドイツにて、ドイツ・ベルリン交響楽団と2ndアルバム「ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第2番」を録音。
2009年6月7日、第13回ヴァン・クライバーン国際ピアノ・コンクールにて日本人初の優勝を飾った。また同時にビヴァリー・テイラー・スミス賞（コンクールのために書かれた新曲の最も優れた演奏に対して授与される）を受賞。
これまで、増山真佐子、川上昌裕、川上ゆかり、横山幸雄、田部京子、千野宜大各氏に師事。現在、上野学園大学演奏家コースに在学中。

桐朋音楽大学を経て、ハンガリー国立リスト音楽院に留学。ハンガリー政府給費留学生として学ぶ。マリア・カナルス国際コンクール特別第1メダル（第4位）、ヴィオットティ＝バルセシア国際コンクール第2位、カントゥ国際ピアノコンチェルトコンクール第1位並びに聴衆賞、マスタープレイヤーズ国際コンクール優勝並びに特別名誉賞、TIM ROMA国際コンクール特別名誉賞等、数々の国際コンクールにて上位入賞、優勝を果たす。それらをきっかけにヤング・プラハ国際音楽祭、マスタープレイヤーズ国際音楽祭、ハンガリー国際5つの堅琴音楽祭（最も才能のあるアーティストに贈られる「堅琴賞」の日本人では2人目の受賞となる。）等のヨーロッパ各地の音楽祭に招聘される。また、ハンガリー交響楽団、ハンガリー MAV交響楽団、ブダペスト・モーツァルト管弦楽団、モスクワ管弦楽団、ルーマニア国立管弦楽団、ルーマニア・クライオヴァ管弦楽団、ポーランド・ステテック管弦楽団、プラハ室内管弦楽団等、東欧、ロシアを中心とした各主要オーケストラと共演。欧州各地で活躍し、高い信頼を獲得した。

2000年に帰国後は、国内外での積極的なリサイタル活動に加え、札幌をはじめとしたコンチェルトの共演や室内楽等、幅広い演奏活動を行っている。04年アウローラ・クラシカル（オクタヴィア・レコード）よりデビュー CD「LISZT-SCHUBERT」をリリース。07年春には2枚目となるCDアルバムのレコーディングを予定している。これまでに河原裕康、宮澤功行、松岡貞子、田崎悦子、ジョルジョ・ナードル、フェレンツ・ラドシュ、ヴィンチェンツォ・バルザーニ、エリック・ハイドシェックの各氏に師事。

01年より、母校である桐朋学園大学音楽学部にて講師を務めている。
ホームページ <http://homepage2.nifty.com/TakahiroHOSHINO/>



千野宜大 (ピアノ)
Hoshino Takahiro, Piano

ンガリー語で「オーケストラ」の意) と呼ばれる定期刊行誌を毎月発行し、情報を広く公開している。これらの組織建てや「オーケストラ」という名前の機関誌を発行することなどはドイツにおける同様の組織を範として作られたことが明らかであるが、ドイツのオーケストラが各都市や県によって独立して経営・運営されているのに対し、ハンガリーのオーケストラは一括して国のサポート下にあることが特徴として挙げられるだろう。

つまりオーケストラ連盟に属していることはすなわち国の優遇的経済保護下に置かれていることを意味し、年間の助成金、補助金の発給はもとより、各オーケストラ間での相互の情報交換、共同活動も容易に行えるよう、第一級オーケストラは他の楽団に比べかなりの優遇措置・政策が取られている。例えば各団体の定期演奏会のシリーズにその団体以外のオーケストラが出演するなどは、慣習的に行われてきた活動の一つである。各楽団に支給される助成金の額もそのランク(カテゴリ)毎に分けられ、また全て情報公開されている。従って連盟に所属している団体とそうでない団体とは(もちろん団体の規模によるものであるわけだが)政府からの給付金は<ひと桁〜ふた桁!>額が異なるほどその差は大きく、よって給付金が少ないオーケストラにとってはよほどその団体の経済基盤を高めなければこれらの団体と肩を並べることはおろか、芸術活動自体を制限されてしまうことを意味しているわけである。こうしたオーケストラにおける“ステータス”が存在し続けていたのも、1989年の「ベルリンの壁崩壊」以降の民主化が進んでいく中で、そのドイツを規範としてこうした組織が作られながらある意味の優遇が維持され続けてきた背景に、この国がかつて共産圏国家としてその文化の栄華を国内外に大きく誇っていた歴史があったことに決して無縁でないように思える。

ではここで主なハンガリーのオーケストラを挙げてみよう。まずはその頂点に君臨するのがブダペスト祝祭管弦楽団(1983年創立)である。世界的にもオーケストラ・ランク・ベスト10に入るこのオーケストラは当初指揮者フィッシャー・イヴァーンとピアニストであるコチシュ・ゾルターンによって設立された団体だ。その後このオケの財団及びブダペスト市評議会の庇護の下に完璧なアンサンブルと高い音楽クオリティを持ち続けて現在に至っているが、雇用は各団員が1年毎の契約で維持されており、これが指揮者フィッシャーの絶対統制的な色合いを濃くしている。



対してそのかつての盟友コチシュが指揮者を務めているのがハンガリー国立フィル(1923年創立)である。旧名・国立交響楽団として小林研一郎が長く音楽監督を務めたあと、後任のコチシュは約半数以上の団員を入れ替えて刷新し、かつての名指揮者フェレンチーク・ヤーノシュが築いたような堅牢なサウンドを復活させている。どちらもこの指揮者あつてのオーケストラというイメージの強さが売り物だ。



またブダペストにはちょうどウィーン・フィルのように普段歌劇場のオケとして演奏し、単独の定期演奏公演を行っているブダペスト・フィルハーモニー(連盟)オーケストラ=国立歌劇場管弦楽団(1853年活動開始)や、世界各地に同様に存在するテレビ・ラジオ局付属のハンガリー放送交響楽団があり、この2つの団体は日本にもかつて来日公演も行っている。その他にも親会社を電話会社に持つハンガリー・テレコム交響楽団や、国営鉄道の運営によるマーズ交響楽団、かつて政府機関直属の組織オケとして活動し、井崎もほぼ毎年のように客演しているドナウ交響楽団、かつてリスト音楽院出身の若者たちによるユースオケとしてスタートし、東京シティフィルにも数度客演している指揮者



ヘイヤ・ドモンコシュが育てたオケから発展したオーブダ・ダニュービア管弦楽団、ハンガリーにおける大作曲家ドホナーニの名を冠したブダフォーク・ドホナーニ・エルネー交響楽団、ハンガリー建国の王の名を冠した聖イシュトヴァーン王交響楽団（ズグロー・フィル）など…ここに挙げただけでもブダペストには9つの大きなオケが存在することになる。

地方に目をやると、ハンガリー第2の都市で劇場付きのオケとして、また組織に合唱団も擁するデブレツェン・フィルハーモニー管弦楽団、毎年オペラフェスティバルを開催し、かつては北ハンガリー響としての名前を持っていたミシュコルツ交響楽団、同じく劇場での公演活動も行っているセグド交響楽団、古都ペーチ市でハンガリーの旧国名をその名に持つパンノン・フィルハーモニー、西の拠点に位置するジェル・フィルハーモニー管弦楽団、指揮者井崎がかつて芸術監督・常任指揮者を務めた西の都市ソムバトヘイを拠点とするサヴァリア交響楽団…そして新参としてソルノク市立交響楽団が活動している。またこの他にも世界的にその名を知られ、ソルノク市が資金援助を長く続けているフランツ・リスト室内管弦楽団等が存在していることを付け加えておこう。

ところがこうしたオーケストラ組織図が最近になって大きく変化し、今転換の時期に差し掛かっている。ブダペスト祝祭管弦楽団はその組織建てを国の補助によるものからブダペスト市の直轄補助とし独自の基金団体を設立した時点でオーケストラ連盟から発展的脱退をしているし、ハンガリー放送交響楽団は国営テレビ局並びにラジオ局の資金難と規模縮小の煽りを受けて事実上の活動休止に追い込まれて同じく連盟から脱退している。この他にもここに挙げた団体のうち複数の団体が先に述べた連盟の規定する基準に合致する活動が出来なくなってきており、来年以降の在籍維持が難しいどころか、オーケストラ団体としての規模の縮小や活動内容・路線の大幅転換を強いられることが決定している。

昨年来の金融危機の煽りを受けてハンガリーは急激な財政難に陥り、政府は国際通貨基金、世界銀行、そしてEUからの200億ドル超の資金提供を求めた。その結果として政府から各オーケストラへの補助金の遅延・減少が大きな影を落としているばかりか、ハンガリーという国の文化政策の後退という大きな局面を迎えている。そのような危機的状況にあって折しもハンガリーが共和国制度を制定してからちょうど20年、そして日本とハンガリーとの間は外交関係制定から140年、戦後国交回復から50年という節目を迎えている中、ただ一人この国で一地方都市の音楽総監督として活動する日本人指揮者がいることは誠に驚嘆に値すると言っても過言ではないだろう。ドイツでは当たり前のように存在する市音楽総監督というポジションが、このハンガリーという国ではまだほとんど馴染みがないユニーク存在という事実に加え、就任してわずか2年でオーケストラが会社組織として独立法人化するきっかけとなったソルノク市との連携や、このオーケストラの団員拡充・活動規模拡大が今回の日本公演に繋がったと語る井崎氏の背景には、今後ハンガリーという国が孕むオーケストラやそれに係わる文化活動に求められる新しい姿が隠されている気がしてならない。氏の話によればオーケストラ連盟に加盟した翌年である来年から補助金の大幅な増額が見込まれている半面、それがどの程度の規模になるかまだ不透明な部分が多いという。折しもこの12月から約2年間の予定で、ハンガリーのメインの演奏会場だったリスト音楽院ホールが改修工事に入り、その後は「MUPA=国立文化宮殿」と呼ばれる新国立コンサートホールに演奏会が集中するという。約1300席弱の座席キャパだった伝統あるリスト音楽院に比べ、最新の近代設備と音響を誇るMUPAは約2000席あり、しかも使用コストが数倍もかかるホールだ。今後2年間でハンガリーのオーケストラ相関図がどう変わるか、そしてソルノク市響がどう変革を重ねていくか…？ これにはぜひ注目を続けていきたいと思っている。

石塚誠 (いしづか・まこと/音楽ライター/ブダペスト市在住)



指揮者コチシュ・ゾルターン



— プログラムノート —

ハンガリー名曲集コンサート

(11/21遊佐町)



ブラームス／ハンガリー舞曲第1番、第4番、第5番、第6番

ブラームス (1833-1897) のハンガリー舞曲集全21曲は、元々ブラームスとドイツと一緒に演奏旅行したヴェイオリニスト・レメーニが伝えた「ロマ音楽」(ジプシーの源流にあたるロマ民族により発達した)をブラームスがピアノ4手連弾用に編曲したものだ。ロマ民族はハンガリー人とは異なるのだが、今やこれがハンガリー音楽として伝えられ、曲頭に必ずあるアクセントや鋭いリズム、テンポと強弱のはっきりとしたコントラストなど民族の“血”を感じさせる大きな特徴だ。今回はブラームス自身がオーケストラに編曲した1番の他、他の作曲家が編曲したオーケストラ版で演奏される。



リスト／ハンガリー狂詩曲第2番嬰ハ短調

ハンガリーに生まれたリスト (1811-1886) は超絶技巧のピアニストとして、また交響詩というジャンルを確立させた作曲家として当時のヨーロッパ中を席卷して回った。しかし本人は家系がオーストリア系であり、親戚にドイツ人も多かったためかハンガリー語が話せず、少なからず後ろめたさを感じていたそうである。しかし幼少の時期を過ごしたハンガリーに対する思いは強く、後年ブダペストに音楽院を作ることに尽力し、そのハンガリー音楽である民謡や舞曲を取り入れて作曲を試みた。前述のブラームス同様その音楽はロマ音楽であり、これをヴェルブンコシュというハンガリー舞曲の形式(様々なテンポを持つ曲の集まり)にまとめたのがこのハンガリー狂詩曲だ。そのもっとも知られた2番が演奏される。冒頭の逆付点のリズム、段々速くなっていくリズム等これがのちのチャールダーシュにと発展していくのだ。

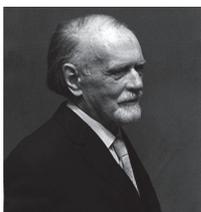


バルトーク／ルーマニア民族舞曲Sz.56

バルトーク (1881-1945) が生きた時代はハンガリー一国土がいまの3倍以上もあり、北はスロヴァキア、東はルーマニアにまたがる大帝国だった。各地の民謡を採取して後世に残すことをライフワークとしていたバルトークは、そのルーマニア各地の民謡を題材に6曲からなるピアノ曲にまとめた。各曲のタイトルは次の通りである

- | | |
|----------------------------|-----------------|
| 第1曲 棒踊り (イ調…イ長調とイ短調が混ざった調) | 第2曲 飾り帯の踊り (二調) |
| 第3曲 踏み踊り (ロ調) | 第4曲 角笛の踊り (イ調) |
| 第5曲 ルーマニア風ポルカ (二調) | 第6曲 速い踊り (イ調) |

作曲から2年後これをバルトークは小編成のオーケストラ用にアレンジしており、これが今日演奏されるものである。



コダーイ／ガランタ舞曲

同じくハンガリーの作曲家であるコダーイ (1882-1967) が幼い時期を過ごしたのが、今のスロヴァキアの西南部にあるガランタという町。ここに伝わっていた民謡を題材としてコダーイは、ブダペスト・フィルハーモニック協会の依頼を受け作曲したのがこの舞曲である。正確に言えば「舞曲集」ともいうべきいくつかの舞曲を組み合わせて作られたもので、これが前述のヴェルブンコシュ形式だ。これにジプシーバンド(楽団)で見られるソロ・クラリネットが活躍する演奏スタイルを取り入れている。もの哀しい孤独な響きがやがて熱を帯びていく様は、いかにもハンガリーらしい血筋を感じさせるものだ。



エルケル／パロターシュ(歌劇「フニャディ・ラースロー」より)

現在のハンガリー国家を作曲したエルケル (1810-1893) は元々オランダ系の家系に生まれたハンガリー人だ。ルーマニアのクルージュでピアニスト及び教師としてのキャリアを始めた後にブダペストのハンガリー語劇場やフィルハーモニーでの活躍を経て、国立劇場で指揮者として作曲家としても活動を始めるようになった。

歌劇「フニャディ・ラースロー」はエルケルが書いた悲劇のオペラ。題名は実在のハンガリーの貴族・政治指導者のことで、後に政争のため惨殺されたことからハンガリーでは英雄視されている人物である。エルケルはこの生涯をオペラ化し50年間で300回も演奏された大ヒット作となった。このパロターシュは第3幕2場のブダ上での夜のシーンで演奏されるハンガリー民族舞踊の一種で「宮殿の踊り」という意味であり、貴族や地位の高い人によって踊られるチャールダーシュ(ハンガリー固有の舞曲)を指す。



J.シュトラウス／チャールダーシュ(喜歌劇「こうもり」より)

11/25ロスト・アンドレア オペラアリアコンサートの同項を参照のこと。ここでは作曲者自身によるオーケストラのみの版によって演奏される。

同／ポルカ「ハンガリー万歳」

既に有名なワルツ作曲家の息子として生まれたヨハン・シュトラウス二世 (1825-1899) は幼少より音楽家になることを反対されていたが、父から独立後に才能を発揮、またたく間に人気作曲家として多くの作品を書いた。当時はブラームスとも親交があり、代表曲「美しく青きドナウ」はかのブラームスさえも羨んだと言われている。

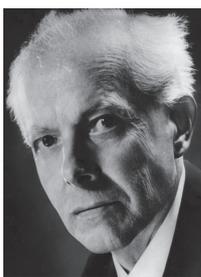
この速いポルカは1896年オーストリアから自治権を獲得して二重帝国となったハンガリー帝国設立から2年目にブダペストを訪れた作曲家によって書かれたもの。曲の最後にハンガリーに古くから伝わる「ラコッツィ行進曲」が挿入されてハンガリー人の血が騒ぐ曲に仕上がっています。

ソルノク市立交響楽団コンサート

(11/22酒田、11/23山形、11/27東京)

コダーイ／マロシュセーク舞曲 (11/22酒田)

民謡収集をバルトークと共に続けていたコダーイにとって、現ハンガリーの東部に当たるルーマニア・トランシルヴァニア地方というのはバルトーク同様に民謡の宝庫として食指がそられる魅力的な場所だったらしい…その4つの民族舞曲を素材にして書かれたのがこのマロシュセーク舞曲である。1927年にまずピアノ曲として書かれ、3年後にオーケストラ編曲されドレスデンで初演されている。



バルトーク／ハンガリーの風景 Sz.97 (BB 103) (11/22酒田、11/23山形、11/27東京)

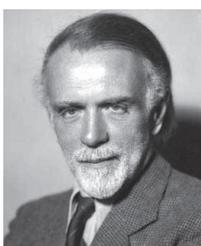
バルトークはハンガリーが生んだ20世紀音楽界において古来の民族的な語法を用いて現代音楽の手法を開拓した人物として絶大な影響を残した作曲家だ。つまり古い民族歌(民謡)や舞曲の素材を用いて、または再構成して彼独自の音楽を展開し、当時の新古典主義音楽の時代に強い個性を放ったと言えるだろう。科学的・数学的な分析も取り入れて構成・発展された作風は、最初のヴァイオリン協奏曲や唯一のオペラ「青い公の城」等で花開くが、この「ハンガリーの風景」は元々彼が1908～11にかけて作曲したピアノ曲で、素朴な旋律や単純な和声はまだそのまま生かされている作品である。曲は5つの楽章からなっている。

- 第1曲 **セーケイの夕べ**…トランシルヴァニア地方(現ルーマニア)の夕暮れの情景を描いたバルトークのオリジナル楽曲。五音階旋律によるゆったりとした部分と早い部分との繰り返しによる味わい深い音楽だ
- 第2曲 **熊踊り**…熊を2本足で立たせヴァイオリンと太鼓の“お囃子”で踊らせていたハンガリー独特の見世物の風習の音楽。荒々しく大きな熊の動きであるが、どこにもユーモラスにも聞こえてくる。
- 第3曲 **メロディ**…四度進行の旋律やドビュッシー風の和声進行などが独特の雰囲気を出し出す。森のざわめきや風の音が聞こえてきそうな弦楽器のトレモロ、木管・ハープの動きが印象的だ。
- 第4曲 **ほろ酔い切減**…酔っぱらって千鳥足で歩く様や、ろれつが回らなくなったりしゃっくりしたりする様子が生き生きと描かれている。世の東西を問わずこうした風景は万国共通だろう。
- 第5曲 **豚飼いの踊り**…ブダペスト南、トルナ地方で何十頭もの家畜の群れを率いた牧夫の吹く笛の旋律をバルトークが採譜した曲。冒頭のヴィオラのシンコペーションのリズムが、そのユーモラスな踊りを表している。



チェミツキー／アヴァ・マリア (11/22酒田、11/23山形、11/27東京)

ハンガリーは昔から合唱が盛んな国であり、それはバルトークと並ぶもう一人の偉大な作曲家コダーイの提唱した音楽教育理論や「歌う若者たち」という合唱運動が息づいているからであろう。このチェミツキー(1954-)もその流れを汲む現代作曲家で、一緒に作曲家グループを作り活動するオルバーンらと共に我が国の合唱界でも知られている数多くの合唱作品を書き続けているが、このアヴェ・マリアは現代の幾分ポップな旋律と中世ルネッサンスのポリフォニーとが融合した美しい無伴奏合唱曲である。



コダーイ／ミサ・ブレヴィス (11/22酒田、11/23山形、11/27東京)

コダーイはバルトーク同様民謡の収集を通じて自らの音楽に反映させたと繰り返し述べているが、実はバルトークに民謡収集を進めたのは他ならぬコダーイであった。彼は音楽教育にも力を入れて多くの教育用の合唱音楽を書いているが、同じくたくさんオルガン伴奏、管弦楽伴奏の合唱曲も書いている。これはハンガリーに優れた合唱団がいくつも存在していたことにも無縁ではないだろう。第二次世界大戦中もブダペスト大学での教壇に立ちながら創作活動を続けていたが、戦闘がブダペストにまで及ぶと郊外の修道院に疎開して、この時ミサ・ブレヴィス(オルガン伴奏版)を作曲している。従ってこの曲にはコダーイの平和に対する祈りが込められていると言ってい

- 第1曲 **Introitus** イントロイトゥス(入祭唱)…オーケストラのみ
- 第2曲 **Kyrie** キリエ(求禱誦「主よ憐れみたまえ」)…Sop.ソロ3人と合唱
- 第3曲 **Gloria** グローリア(栄光頌「天には神に栄光」)…Alt.Ten.Bassソロと合唱
- 第4曲 **Credo** クレド(信仰宣言「我は信ず唯一の神」)…Ten.ソロ(先唱)と合唱
- 第5曲 **Sanctus** サンクトゥス(三聖頌「聖なるかな」)…合唱のみ
- 第6曲 **Benedictus** ベネディクトゥス(謝頌「ほむべきかな」)…合唱のみ
- 第7曲 **Agnus Dei** アニェス・デイ(神羔頌「神の子羊」)全ソロと合唱
- 第8曲 **Ite missa est** イテ・ミサ・エスト(解散頌「謝儀を解散す」)

Missa brevisとは“短いミサ”という意味であるが、ここではミサの聖式における通常文のみに作曲したというエッセンスを表わすものと考えてい



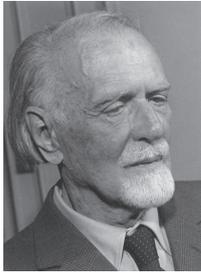
ラフマニノフ／ピアノ協奏曲第2番ハ短調op.18 (11/26甲府)

19才で新進作曲家として出発し、最初の歌劇「アレコ」や有名な前奏曲嬰ハ短調の成功によって世に知られるようになったラフマニノフ(1873-1943)は3年後に最初の本格的な交響曲に取り組んだ。だが自信を持って世に問うた作品は初演演奏の酷さと悪意に満ちた批評により真価を認められることなく、作曲家を創作不能の鬱状態にまで落とすしてしまった。それを救ったのが当時ヨーロッパで流行していた心理療法に基づく催眠療法による治療を専門にしていたダーリ博士である。博士の献身的な治療によってラフマニノフが創作意欲を取り戻し、イギリス王立交響楽協会から依頼されていたピアノ協奏曲に着手しその完成を機に曲を博士に捧げている。しかし同時に彼を救ったのは、同じ歳の歌手・シャリアピンだったことは意外と知られていない。生涯に渡って友情が続いたこの大歌手が初めてミラノ・スカラ座に招かれた時に、彼は心病む友人を伴った。サン・レモに近い滞在先の地中海の明るく開放的な雰囲気の中、ラフマニノフはこの協奏曲のスケッチを進めた。これまで都会にいて苦しめられていた孤独な憂鬱感を客観的に振り返りながら、彼の胸中に湧いたのは世紀末ロシアへの厭世感だったかもしれない。

第1楽章 Moderato 冒頭の鐘の音を模した和音をはじめ、随所にピアニストでもあったラフマニノフの超絶技巧を彷彿とさせるテクニクが要求される。

第2楽章 Adagio sostenuto メランコリックなメロディや哀愁を帯びたハーモニーはラフマニノフの大きな特徴だろう。

第3楽章 Allegro scherzando 躍動感あふれるリズムや特徴ある“節回し”は作曲家のもう一つの真骨頂である。大きなクライマックスは後の交響曲第2番にも繋がっている。



コダーイ／「くじゃくは飛んだ」の民謡旋律による変奏曲 (11/26甲府)

コダーイが57歳の時にアムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団創立50周年記念に委嘱された作品。その素材となったのは言うまでもなく民謡で、ハンガリーを古くから支配した「オスマン・トルコ帝国」や二重帝国として支配したオーストリア帝国(ハプスブルグ家)からの解放をうたったものであることから、この作曲がされた1939年頃に台頭していた「ファシズム」への抵抗の思いが秘められているとする向きもある。

曲は旋律を様々な楽器を組み合わせる演奏される16の変奏部分と長大なフィナーレとで構成されており、コダーイのオーケストレーションの粋を集めたものである。中でも東洋的な旋律を木管が奏する部分や、ホルンの四重奏が拍子を増しながら大きなクライマックスを作る部分、また代表作である歌劇「ハーリ・ヤーノシュ」を彷彿とさせる葬送行進曲や、フルートが篠笛のような旋律を奏する部分など大変に魅力のあふれる作品に仕上がっている。



バルトーク／ピアノ協奏曲第3番Sz.119 (11/27東京)

第二次世界大戦が勃発してナチスが台頭してくると、ライフワークである民族音楽の研究が出来なくなることや、政治的にも自由な活動が制限されることを恐れたバルトークはアメリカへの移住を決意し、後のことを盟友コダーイに託して1940年にアメリカへと渡る。しかし少々堅物であった性格や生来の社交嫌いの志向はますます強まり、ピアニストとしての演奏活動以外は、ハンガリーから持ち込んだ膨大な資料の整理研究にばかり没頭する毎日を送っていた。しかし体の不調が徐々に強まり、渡米わずか3年で彼は病のため入院を余儀なくさせられて全ての活動が中断してしまう。

先にアメリカ移住していたブダペストでの弟子である指揮者フリッツ・ライナーや、当時のボストン交響楽団指揮者クーセビツキーによって支援され創作活動も復活するが、1945年のこの時既にバルトークは白血病という不治の病に冒されていたのだ。

バルトークは最後の力を振り絞って愛妻であるピアニスト・ディッタ夫人に捧げようと3番目のピアノ協奏曲の作曲に取り組むが、最後の17小節を残して他界してしまう。曲は作曲者の指示によって弟子であるシュルイにより完成され、その後次男のペーターや指揮者ショルティらによって現在の形に改定されている。

第1楽章 Allegretto 新古典的な形式、当時のアメリカの嗜好を意識?した明るい調性(ホ長調)を持つ。技巧的には容易であるとされるが、随所に見られるハンガリーのリズムや拍子感はこの作曲家への理解と共感を演奏者に求めている。またこの直前に完成された「管弦楽の協奏曲」と同じモチエフを持つ。

第2楽章 Adagio religioso 弱音器をつけた弦楽器から始められる抒情的な教会旋法の旋律とピアノとの対話が印象的な楽章。途中から曲奏は一変し、森のざわめきや鳥の声を思わせる箇所がハンガリーへの郷愁を誘うようだ。

第3楽章 Allegro vivace ロンド形式だが、その展開に作曲者のユニークさが表れている。民族舞曲のような旋律はハンガリー独特の逆付点やアクセントが見られ、同じく「管弦楽の協奏曲」のフィナーレのような下行及び上行旋律が聴き手に大きな昂揚感を与える。

ロスト・アンドレア オペラアリアコンサート (11/23山形、11/27東京)



グノー／歌劇「ファウスト」よりバレエ音楽第1曲「スピア人の踊り」(オーケストラ)

同／歌劇「ロミオとジュリエット」(グノー)から「私は夢に生きたい」(ロスト)

19世紀後半のフランスロマン派オペラを代表する作曲家のひとりグノーは未完を含め生涯13のオペラを書いたが、中でもこの2つは代表作だ。この時代の様式に従い「ファウスト」第5幕に挿入されている特にバレエ音楽はどれも優美で華やかだが、力強さとワルツの典雅さこそはこの作曲家の真骨頂だろう。ロストが歌う今宵一曲目の



アリアは第1幕のキャピュレット家の仮面舞踏会でジュリエットが歌うアリアで、《ジュリエットのワルツ》としても知られている。まだロミオに会っていない、少女ジュリエットの淡い恋心や憧れが歌われる。

ドニゼッティ／歌劇「ドン・パスクワレ」からカヴァティーナ“騎士はあのまなざしを”（ロスト）

ドニゼッティはロッシーニやベッリーニと並ぶ19世紀前半のイタリア古典～初期ロマン派を代表するオペラ作曲家。この曲は既に「愛の妙薬」「ランメルモールのルチア」等で成功を収めていたこの作曲家の円熟期の作品で、第1幕第3場で主人公ノリーナが歌う曲だ。古い騎士物語を読んで現実にはあり得ないとひとり語り出す、勝気で気まぐれ、それでいて愛らしい主人公の性格が表出されている。



ヴェルディ／歌劇「マクベス」からバレエ音楽第1番（オーケストラ）

同／歌劇「リゴレット」から“慕わし人の名は”（ロスト）

続いてヴェルディの作品が並ぶ。「マクベス」はシェークスピアの戯曲を原作に作曲した初期のオペラ。初演から17年経ってパリ・リリック座での上演を機に作曲者が大幅な改訂をし第3幕にこのバレエ音楽が挿入された。権力の座を狙うマクベスが訪れた洞穴に住む預言者たる魔女たちの様子が描かれる。また続くアリアは道化師リゴレットに人目に触れないよう育てられていた美しい娘・ジルダが父の仕える侯爵マントヴァに教会で偶然に出会い、貧しい学生だと偽って名乗ったその男と恋に落ちその名を慕って歌われるものだ。

ヴェルディ／歌劇「椿姫」より第1幕への前奏曲（オーケストラ）

同アリア「ああ、そはかの人か～花から花へ」（ヴェルディ）（ロスト）

おそらくこの作曲家の作品中もっとも知られているオペラの前奏曲をオーケストラが演奏した後、第1幕最後に歌われるヴィオレッタの有名なアリアが続く。高級娼婦としての身ながら気高く生きるヒロイン・ヴィオレッタの悲痛な思いを語るような前奏曲の後に曲調はそのヴィオレッタが暮らす社交界の華やかな趣に一転、彼女に対していちずな思いを寄せる青年アルフレッドの愛の告白を受けたヴィオレッタ自問しながらその葛藤を歌う。



ドヴォルジャーク／「チェコ組曲」作品39より第2曲“ポルカ”（オーケストラ）

同／歌劇「ルサルカ」より“月に寄せる歌”（ドヴォルジャーク）（ロスト）

後に「新世界」交響曲で名を馳せるこの作曲家がまだチェコのプラハ国民劇場のヴィオラ奏者だった頃に書かれたのが全5曲からなる「チェコ組曲」。その2曲目「ポルカ」では、ボヘミアの自然やそこに集う人々の舞踊などが抒情的に奏される。続いて歌われるのがドヴォルジャーク晩年のオペラ第1幕でのアリア。水の精ルサルカが人間の王子に恋をし、その愛おしい気持ちを月に願う情景が歌われる



エルケル／歌劇「フニャディ・ラースロー」より“パロターシュ”（オーケストラ）

ハンガリー国民音楽の祖エルケルの書いた悲劇のオペラからの舞曲。パロターシュとはハンガリー民族舞踊の一種で「宮殿の踊り」という意味であり、貴族や地位の高い人によって踊られるチャールダーシュを指す。

カールマン／歌劇「チャールダーシュの女王」より

“シルヴィア登場の歌～ジーベンピュルゲンの娘（私の故郷は山の中）”

レハール／歌劇「メリー・ウィドウ」より“ヴィリアの歌”

多くのウィンナーオペレッタの作曲家として知られるカールマンやレハールは、どちらもハンガリー出身の作曲家だ。この「チャールダーシュの女王」はカールマンの代表作の一つで、この“登場の歌”は主人公である歌手シルヴァがアメリカ公演に旅立つ前に聴衆に別れを告げる際に歌うアリア。抒情的な前半部から一転、後半は激しいチャールダーシュの速い曲想に変わり、ハンガリーの『血』を感じる楽曲である。「メリー・ウィドウ」はハンガリーで生まれた後プラハ～ウィーンと移り住んだ作曲家の出世作で、“ヴィリアの歌”は第2幕冒頭主人公のハンナが国王祝賀パーティでの民族舞踊に続いて故郷を忍んで歌われる。今日は第2幕・幕開けの序奏と舞踊（ハンガリー舞曲“コロ”）に演奏される（予定）。



J.シュトラウス作曲／歌劇「こうもり」より“チャールダーシュ”

ウィンナーオペレッタの最高峰に位置するのがこの「こうもり」だ。舞台となっているのが大晦日の晩であるため、ヨーロッパでは暮れや大晦日に演奏されることが多い定番オペレッタ。この“チャールダーシュ”は第2幕の夜会で、主人公ハンナが取監前にもかかわらず不貞を働こうとする夫を懲らしめようと、身分を偽りハンガリーの貴婦人としての証を立てようと歌うアリア。ゆっくりと始められる「ラッシャン」部分と速く演奏される「フリシユカ」との2部構成という伝統によって作曲されている。



プッチーニ／歌劇「ラ・ボエーム」より“私の名はミミ”（11/23山形）

ヴェルディと並んでイタリアオペラの最高の作者のひとりプッチーニの初期の代表作。戯曲をもとに書かれた台本に対しプッチーニ自身の注文が多く当初は完成が難航しただけに、その出来栄は素晴らしく現在もなお人気の高いオペラ。第一幕消えてしまったカンテラの火を借りに来たお針子ミミは、そこで同じく貧しく暮らす詩人のロドルフォに出会う。その美しさに惹かれたロドルフォは暗闇で落としてしまったミミの部屋の鍵を探しながらその冷たい手に触れてアリアを歌い自分の身の上を話す。それに応えるようにミミが歌うアリアがこの“私の名はミミ”だ。



